



# 奇怪伯爵の オタ・カル漬け丼

---

奇怪伯爵

---

## ミラクルジャンプ

---

表紙に惹かれて、新たに創刊された漫画雑誌を購入。

その名も『ミラクルジャンプ』。

「少年ジャンプ卒業生に告ぐ」の一文が、ピンときたらしい。

表紙画は、桂正和氏だった。

そりゃ、惹かれるわなー。

この雑誌、SFとファンタジーがテーマらしく、漫画に夢中だった頃の想いがくすぐられた。裏表紙にも作り手のメッセージが添えられており、共感できる熱い想いが伝わってきた。

そういえば、最近、漫画雑誌を読まなくなっていた。

気に入る作品が、少なくなっている。

自分は、いつまでも漫画を読み続けると決めていたが、まさか魅力を感じなくなるとは予想外だった。

それに、さすがに年齢のこともある。

書店で漫画の単行本を買うのは、エロ本購入に近い勇気が必要になってきている。

『いい歳こいて、漫画かよ……』

なんとなく、店員が心の中で蔑んでいるような気がする。

『まあ、あの人。漫画なんか買って……』

知らないオバちゃんが、ほくそえむ。

世間体に囚われた僕は、抗う術を失いつつあるようだ。

オタクのみんな、オラに堂々と漫画を買うだけの勇気を分けてくれ！！

話を元に戻そう。

『ミラクルジャンプ』。なかなか読み応えある内容だった。

特に気になった作品は、

『未来のジェノス』 作者：大亜門氏。ジャンプファンのツボを心得ているギャグ満載。声を出して笑った。

『テラフォーマーズ』 作：貴家悠氏 画：橘賢一氏 しっかりSFした内容と、それに負けない画力が魅力。

『デスパティー』 作者：神田哲也氏。迫力の画タッチと、ちょっと奇妙な世界観が独特。

漫画ファンとして、この流れがずっと続いてほしいと思う。

僕は、きっと漫画を持って棺桶に入る。

やはり世間体が気になるが、漫画のないあの世はきっと寂しいに違いない。

## エルガイム

---

エルガイムとは、テレビアニメ番組の『重戦機エルガイム』だ。  
たぶん、デザイン的に最も好きなロボット・キャラクターと言っても過言ではない。  
だけど、ストーリーを覚えていない。  
いや、全話見たかも定かではない。  
それなのに、この高評価は何故か？

要素は、二つ。

その一。

僕は永野護氏のデザインが、ツボなのだ。

もちろん、当初はデザイナーの名など知らなかった。

このことが判明するのは、アニメ界に関心を持った僕の、第2オタク期にあたる。

周囲がアニメや特撮から離れていく、いわゆる思春期だ。

僕は、皆と違うベクトルへと進んだ。

アニメに漬かる高校時代。

異性に色気づく友人。2次元に色気づく自分。

たしかこの頃、アニメ雑誌『ニュータイプ』で永野護氏の『ファイブ・スター・ストーリーズ』連載が開始される。

モーター・ヘッドと呼ばれるロボットが、漫画に続々登場した。

とてもアニメにはできないだろう複雑かつ流麗なデザインは、ますます僕を虜にする。

(ちなみに、この作品はアニメになったから凄い！！)

そこで僕は、エルガイムも同氏のデザインであることを知った。

さらに、Zガンダムに出現するモビルスーツ百式も同様であることを知り、学校の授業以上に感心したのを覚えている。

ともかく、永野氏のデザインは、僕の感性を奮わせるエンドルフィンを有しているのだ。

その二。

『エルガイム』の歌が、素晴らしい。

後期の鮎川麻弥さんの『風のノーリプライ』も素敵だが、何とんでもM I Oさんの『Time for L-GAIM』がイチオシ。

一度聴いたら、口ずさまずにはいられない名曲。

好きな曲にもかかわらず、実は歌詞をきちんと覚えていない。

だから、英語部分が不明瞭なのだ。

それでも、僕は口ずさむ。

『heavy metal』のマシンボイスを真似し、M I Oさんとともにボルテージをあげていく。

僕はヘッドフォンをして曲を聴くので、周囲には何を聴いているのか分からない。  
頂点を迎える興奮度。

『エルガー—————ッ！！』

僕の雄叫びが、今日も宅の部屋にこだまする。  
誰か、背中を抱いてほしい。

## P e r f u m e

---

ずっと気になる存在だったが、遠目で見ていた。  
家人は否定的で、今さら自分だけが気になるといっても、どうにもならない。  
我が家では、P e r f u m eは崇めてはいけない存在となってしまった。

彼女らが歌番組に出演すると、僕はさも関心がないふりをする。  
視線を外し、おもむろに雑誌を読みだす。  
でも、しっかり耳は立てている。  
聴き洩らす訳にはいかない。  
関心のなさを装いつつ、全神経をP e r f u m eに注ぐ。  
この演技が、なかなか難しい。  
あまりに関心が無いと、チャンネル変えられてしまう。  
そうなのは、元も子もない。  
そこで、適当に顔を上げては画面を見る作戦に出た。  
興味はありませんが、画面は見ていますアピールだ。  
そういう戦いを、僕はしばらく続けた。

やがてP e r f u m e熱は、悪化の一途を辿る。  
家人さえ否定しなければ、こんなに苦勞する必要はない。  
だが、僕の育ってきた家庭は、アイドルとか恋愛とか、好きとか嫌いとかといったテーマについて、非常に閉鎖的な環境だった。  
僕ら家族は、お互いの好みを全く知らないのだ。  
これも僕のバリ・オタ気質醸成のための、良い土壌となったのだろう。  
オープンよりクローズ。  
これが、我が家族のモットーとなっている。

しかし、熱が冷めぬなら、いたしかたあるまい。  
要は、見つからなければ、良いのである。  
そうして、僕は『GAME TOUR』のDVDを購入した。  
やはり、P e r f u m eは画像抜きでは語れない。  
僕は部屋にこもり、鑑賞を繰り返す。  
今日も、聴いた曲のメロディが頭を離れない。  
これは、会社で仕事中也続き、展開する。  
真面目な打合せをしている最中、僕の頭の中で『チョコレート・ディスコ』が響いていることに誰も気がつくまい。



## STOP 加齢臭！！

---

自慢じゃないが、僕の容姿は大学卒業時からあまり変化がないらしい。

久しぶりに会った知人は、口を揃えて言う。

『全然変わっていないね』

これはこれで、嬉しい。

けれど、僕の身体の中身は、しっかりと年齢を重ねている。

そのことを一番実感できるのは、体臭の変化だろう。

明らかに、臭いの質に変化が表われた。

デオドラントアイテムは、ギャッツビー・バイオコアのロールタイプを使用。

何となく、これが一番効いている気がする。

以前は、これで十分だった。

ところが、どうも最近様子がおかしい。

臭いが勝っているのか？

まさか、そういうことなのか？

強力な敵が、出現してしまったのかもしれない。

自問自答する場面に遭遇することが多くなった。

この臭いは、僕から発せられているのか？

それとも、周囲の人間なのか？

疑心暗鬼に陥り、全てに疑いをかける僕。

何とかせねば。

これは、外交上最優先に解決せねばならぬ問題なのだ。

僕は、イトーヨーカドーの紳士・肌着売り場へ急いだ。

何故、イトーヨーカドーか？

それは、明らかに『消臭』を謳った肌着が売っているからだ。

中年の味方と言っても過言ではない。

ああ、ヨーカドーよ。いつまでも中年の道標であってほしい。

期待どおりの商品が、陳列されている。

『抗菌防臭』。

何と頼もしい機能。

その文字が書かれた商品を、僕は手当たり次第に漁る。

それでも、ひとつのメーカーでは心細い。



何種類かを取り混ぜて、リスクを分散させる。

ふと、片隅のコーナーから宣伝文句が流れてきた。

『汗のニオイ・加齢臭がスッキリ消える！』

なに。本当か？

それは、小さなモニターに映し出されたCMだった。

すぐさま、その商品をチェック。

特許素材マキシフレッシュプラス使用。

トップレベルの消臭率を実現。汗のニオイ92%・加齢臭82%をカット。

何と画期的だろう。

これは、買うしかない。

その価格、1枚1,980円。

ぐぬう、足許を見やがって……。

しかし、この価格なら機能に信憑性があるではないか。

買う、買わない、買う、買わない……。

苦悩の20分。

金を取るか、世間体を取るか。

結局、僕は世間体を取った。

商品の名は、『MXP』。

今流行の車CM『TNP（低燃費）』ではない。

メーカーを確認すれば、何とあのゴールドウインではないか！！

『MXP』着用の日は、1,980円分の安心がついてくる。

パワフル消臭。

その言葉に偽りなし。

## オンリー・ザ・ストロング

---

世間一般では、明らかにB級というレッテルを貼られる映画でも、いつまでも記憶に残る作品がある。

『オンリー・ザ・ストロング』。

この映画は、僕にとって正にそれだ。

主演、マーク・ダカスコス。マーシャルアーツ系作品でたまに見かける存在。

私的には、ひろみGO!の雰囲気を持つ俳優としてカテゴライズしている。

『American Samurai』のケンジロウ役で注目。

日本の漫画『クライング・フリーマン』の実写版では、主役フリーマンを演じている。

しかし、彼の代表作として推すのは、この『オンリー・ザ・ストロング』なのだ。

マーク演じるは、主役の元特殊部隊&今ハイスクール教師。

不良の巣窟と化した高校立て直しのため、元兵士が体育教師として赴任するという、特にB級アクション映画では珍しくもない設定。

しかし、並みいるB級アクションと一線を画す要素が一つ含まれている。

それは、ブラジル格闘術カポエイラに他ならない。

主人公は、このカポエイラを体育の授業に取り入れ、不良生徒との絆を深めていく。

そう、どちらかといえば、『スクール・ウォーズ』のような熱血スポ根ドラマに近い。

もちろん、アクション映画であるので、格闘シーンもふんだんに盛り込まれている。

生徒の従兄にギャングがいて、最後はマーク扮する先生との対決が待っている。

体力を消耗し、負けそうになるマーク。

そんな時、生徒達がカポエイラの唄を歌って勇気づける。

先生と生徒の絆。

生徒たちは、更に歌う。

その歌は、日頃の練習で使用した曲。

歌によって作られたリズムが、先生の体を突き抜ける。

「パラナウエ〜、パラナウエ、パラナ……」

レゲエ調のリズムが、ボロボロとなった肉体を動かす。

そして、マークは最期の大技、トリプル・スクリュウ・アタックを繰り出し、生徒たちを守るのだった。

ラストがまた感動的。

ハイスクールの卒業式。

それが終わると、カポエイラ・ダンシング・パーティーの如く、生徒たちが音楽に乗せて取得した技を披露。

最期は、マークが技を披露して、最大級の爽快感を残し終了。

きっと貴方も、カポエイラを習いたくなるに違いない。

DVD化されていないので、やっぱり世間の評価は低いのかもしれない。

しかし、最高。